

蝶と野火

1

群生した蝶が
燃えさかつて炎をあげてゐる野火に
いつせいに襲ひかかる

あるひは

野火は炎の列を
ゆつくりと移動させながら
蝶を追つてゐる
彼等を
焼きつくさうとして
大きい舌を伸ばしてゐる

2

宋 孝宗 淳熙元年 千七百七十四年
二十歳の姜白石は
漢川に嫁してゐる姉を訪ねるために旅に出た
途次 風が強く吹く日があつた
風は野を奔るが如くであつたといふ
馬は倒れ 笠は飛ぶにまかせるよりいたしかたがない
行く人とてもなく
草木の茂るばかり
たちまち 野火が起つた
雷鳴のやうにとどろく音
舞ひあがるはげしい炎は
天を焼かんばかりの勢であつた
虎の逃げまどふのを見た
自らも煙にまかれ 命からがら逃れた

清 高宗 乾隆三十九年 千七百七十四年
揚州八徑の一 羅聘
逃げまどふ兎の奇妙な姿勢
野火の 炎の 斜めの構図
すさまじさと美しさと
「姜白石詩意画冊」に描いた

千九百七十六年 十二月某日

僕は はたして

君を捉へることが出来るだらうか

3

雲母峰の岩側に跣蝶洞がある

蝶は花樹のあひだにゐる

人間が行くと じいつとしてゐる

蝶のとまつてゐる枝を折つて

そつと 洞を出てみると

蝶はもとの場所に戻つて行つてしまふといふ

かういふことではないだらうか

洞の中は多分暗いだらうから

洞に入る時 人間は蠟燭のやうなあかりを持つて入る

その光が洞内の雲母にうつつて

花が咲いてゐるやうに キラキラと雲母がかがやく

蝶のやうに 深い色のもの

人間が 蝶だと思つて

最も美しい雲母の破片を打ちくだいて

洞を出ると 外光のために

あかりが反映してゐたのが消失してしまふ

手中の雲母は単なる岩石にすぎない

蝶は もう ゐない

羅浮山は広東省増城県にある

一度 行つて たしかめて来たいものである

蝶がゐるといふのも

蝶がゐないかもしれないといふのも

どちらでもよいと言つてしまへばそれまでだが